

事例 4

「不登校」が予測される高校2年生への予防的な指導援助

～学級の受容的な雰囲気づくりと家族への気づきを通して～

(指導援助者は学級担任, 41歳, 男性, 社会科担当)

1 予測される問題行動 不登校

○友人は中学校から少ない。現在はB子を中心に数名の生徒が、A子を受け入れている。

2 対 象 高等学校2年生 女子 (A子)

3 問題行動予測の動機

○服装・髪型が乱れ、生活態度に落ち着きがなく学級内で孤立している。

○遅刻の日数が2年生になって多くなってきた。

○授業では意欲がなく、態度もなげやりで、学習成績も下がってきた。

4 資 料

○YG性格検査(5月実施)の結果は、B型でやや情緒不安定、社会的不適応の傾向がある。抑うつ性が高く、欲求不満も強い。

○遅刻は4月(7回)、5月(12回)と増えている。

○小・中学校では学力も高く、高校入学時は上位であった。

○AAI学習適応性検査(6月実施)結果は、偏差値32。特に学習環境、心身の健康の項目は、いずれも5段階評定で「1」である。

○父親はA子が5歳のとき離婚し、小学校3年のときに再婚した。祖母はそのときA子連れて別居した。父親の再婚後、生まれた弟二人いる。

最近、祖母が体調をくずしがちなため、近所に住む伯父(父親の弟)の家で祖母ともども食事をしている。しかし、伯父の家族はA子と祖母を必ずしも歓迎していない。A子と祖母、父親、継母、伯父の人間関係は複雑で、A子が不安や不満を真剣に相談できる相手はいない。

○祖母はA子を溺愛し、A子は料理、洗濯、清掃などを家ではほとんどしたことがない。

○A子は看護学校への進学を希望している。

5 予測診断

A子は、幼児期に両親の不和・離婚のため、情緒的に不安定な状態で育った。父親の再婚後、祖母とともに別居して、祖母の溺愛と過干渉的な養育態度のもとに育ったため、生活態度はわがままで自己中心的な面も強い。

また、別居後、親との接触は少なく、漠然とした不満感や不信感を持っている。

基本的な学習能力が高く、勉強も好きだったため、中学校までは学習成績がよく、友達とのかかわりの乏しさをのぞけば、特に問題もなかった。しかし高校入学後、急束に気力を失い、それまで以上に内向化し、成績も下がった。

A子を受容する祖母の存在と、卒業後看護学校に進学したい希望が、現在のA子をかろうじて支えているが、一方では学校への不適応感も次第に強まりつつある。このような状態の中で、適切な指導援助がなされなければ、「不登校」などの問題行動が起きることが予測される。

6 予防仮説

A子の学校生活への意欲を高め、家族関係への見直しを図ることで「不登校」は防げるものと考えられる。

(1) A子への働きかけ

機会あるごとに、優しい言葉や激励の言葉をかけながら、A子の気持ちをときほぐし、しっかりとしたラポールを形成する。また、学習・進路相談を進め、意欲づけを図る。

祖母の手伝いを勧め、自立心を育てる。